
万葉時代のグリーンケミストリーへの序
—万葉時代の政治的・文化的背景—

杉山一男

Introduction to Green Chemistry in the Manyo Era
—Political and cultural background of Manyo era—

Kazuo SUGIYAMA

Synopsis

The Manyo Era is characterized by 4516 *waka* poems that were written and recorded in a famous Japanese ancient anthology, Manyoshu. In those days, much of Japanese culture and civilization had been developed within Japan; however, there was also cultural enlightenment, owing to the foreign products and technologies brought by people from overseas. It was thought that the reform of strengthening new industries and military in the era was comparable to that of the Meiji Restoration. Although chemical industry contributes to making life more convenient, it also has a negative impact on the human body and environment. Chemical technology that has less impact on the environment is called green chemistry. In the present study, we will sequentially discuss the following points: 1) the definition of the Manyo Era and green chemistry, 2) persons who came from overseas and significantly contributed to the development of chemical technology in ancient Japan, and 3) the political and cultural background of the period of each emperor (*Okimi and Tennou*) in the Manyo Era. Along with the discussion, I will introduce a Manyo *waka* poem that is relevant to each event.

1. はじめに

18世紀中葉にイギリスで起った産業革命は19世紀にはヨーロッパ諸国に波及し、その頃から特定の地域で水質汚染・大気汚染・土壌汚染など環境汚染の被害が顕在化し始め、工業化の進展とともに世界中に波及した。日本においても、足尾鉍毒事件(1890年頃)・イタイイタイ病(1910年頃)・水俣病(1956年頃)・四日市ぜんそく(1960年頃)などの公害事件が起こっている。しかし環境に起きている汚染問題とその結果について広く認識されるのはR. Carsonが1962年に発表した「沈黙の春 *Silent Spring*」以降であろう¹⁾。「この地上に生命が誕生して以来、生命と環境という二つのものが、互いに力を及ぼしあいながら、生命の歴史をおりなしてきた。といっても、たいてい環境の方が、植物、動物の形態や習性をつくりあげてきた。地球が誕生してから過ぎ去った時の流れを見渡しても、生物が環境を変えるという逆の力は、ごく小さなものにすぎない。だが、二十世紀というわずかのあいだに、人間という一族が恐るべき力を手に入れて、自然を変えようとしている。ただ自然の秩序をかき乱すのではない。・・・暴力で自然が破壊されてゆく」と彼女は初めて環境汚染に警告を発した。食糧増産のため防疫剤や殺虫剤などの農薬(例えば、DDT:ジクロロジフェニルトリクロロエタン)を撒き過ぎたために虫がいなくなり、それを餌とする鳥がいなくなるだろうという。1996年、T. Colborn、D. Dumanoski、J. P. Myersらは「奪われし未来 *Our Stolen Future*」において、ある種の化成品が内分泌攪乱物質(環境ホルモン)として極めて有害であると警告した²⁾。D. Cadburyもまた「メス化する自然 *The Feminization of Nature*」で同様の警告をしている³⁾。

一方、環境そのものや天然物も人体に有害なものがある。危険な放射線を出す岩石があり、すべての生命のエネルギー源である太陽光線すら短波放射線が含まれていて生命を傷つける。有機・無機にかかわらず天然物も多くの毒物が存在する。重金属について言えば、足尾鉍毒事件の銅、イタイイタイ病のカドミウムのほか、水銀、鉛、砒素、クロムは健康被害をもたらす有害金属の代表格である。水俣病は有機水銀が原因物質である。

奈良時代、聖武天皇は仏教による鎮護国家・五穀豊穡を祈願して奈良の大仏を造立した。大仏は金メッキが施された金銅仏である。古代、金メッキはアマルガム法⁴⁾を採用していた。金を常温で液体の金属である水銀に溶かしてアマルガムとし、銅像の表面に塗布した後、火であぶると水銀が蒸発して金メッキが完成する。このとき大量の水銀蒸気が大気中に放出されるので、作業者の多くが水銀中毒になったのではないかと考えられる。奈良時代の大規模公害である。筆者が大仏を含む当時の多くの金銅仏に用いられた危険な

メッキ法に注目したことが万葉時代のグリーンケミストリーの研究に取りかかる端緒となった。

本論文では、グリーンケミストリーの立場から見た古代日本の文化・文明のオリジンの研究の端緒として、1)万葉時代とグリーンケミストリーの定義、2) 古代日本の文化・文明に大きく寄与した渡来人について、そして3) 万葉時代の政治的・文化的背景を天皇ごとに編年的に述べる。このとき、関連する万葉集の歌が登場する。別稿で述べる古代日本のグリーンケミストリーの各論には、製錬・金メッキ法、醸造・染色・菓草の化学などが含まれることになる。

2. 万葉集と万葉時代

成立時期がはっきり分からない万葉集⁵⁾は、多く(万)の詩華(葉)を集めた(集)ものの意であろう。万葉集はやまと言葉を万葉仮名と呼ばれる漢字で書き表している。日本書紀⁶⁾によると、5世紀前後の応神天皇(15代：ホムタワケ大王)の時代、百済から王仁が来朝して「論語」と「千字文」をもたらしたとあるが、漢字の伝来はもっと早い時期であろう。倭(日本)は、古くから、中国や朝鮮半島と通交があり、国家間の公式な文書には漢字が用いられており、渡来人やその末裔が通訳あるいは尚書として漢字文を理解し、やまと言葉に翻訳できたと考えられる。秦始皇帝の時代(前221年～前206年)、国を追われた人々は流亡し始め、難民として日本列島に渡来して、稲作文明とともに漢字をもたらしたであろう。西暦57年、倭奴国が後漢光武帝に奉獻朝賀して「漢委奴國王印」と印刻した金印を与えられている。後漢書には「**建武中元二年 倭奴國貢を奉じて朝賀す 使人自ら大夫と称す 倭国の極南の界なり 光武 印綬を以て賜う**」とある。また、永初元年(107年)には、倭国王の帥升が後漢安帝に生口(奴隸)160人を献上している。更に、景初3年(239年：または景初2年)、邪馬台国の卑弥呼は魏に難升米を派遣し、皇帝曹叡から「親魏倭王」の金印と銅鏡100枚が与えられている。

万葉仮名は、漢字文では言い表せないやまと言葉の細かなニュアンスを表現するために考案され、5世紀後半にはほぼ確立していたと考えられる。例えば、埼玉稲荷山古墳から出土した辛亥年(471年)製作の鉄剣に倭の五王⁷⁾の武と比定されるワカタケル大王(雄略天皇：21代)と被葬者ワケがそれぞれ「獲加多支鹵」と「乎獲居」と万葉仮名で金象嵌されている。古代日本人の英知の成果である万葉仮名の解説(訓)には、「万葉集考」の著者賀茂真淵も「古事記伝」を著した本居宣長も苦労したことであろう。万葉仮名の訓については佐佐木の解説がある⁸⁾。

万葉仮名はやまと言葉の音を漢字で表わしている。漢字の意味とは無関係に表音(発音)だけを借りて書き表す仮借法で綴ったり、漢字と同じ意味の単語があれば訓読みして用いる。例えば、額田王ぬかたのおおきみが天智天皇を慕った歌(488番)と天智天皇に召され寵愛されたが後に中臣(藤原)鎌足の嫡室となった鏡王女かがみのおほきみが鎌足の墓後に詠った歌(489番)は万葉仮名では次のように綴られている。

君待登 五戀居者 我屋戸之 簾動之 秋風吹 (488番)
 風乎太尔 戀流波乏之 風小谷 将来登時待者 何香将嘆 (489番)

額田王の歌は、「君待つと わが恋ひをれば わが屋戸の すだれ動かし 秋の風吹く」と解され、「あなたを待って恋しく思っていると 我が家の簾を動かして秋風が音を立てるのよ」との意である。風は人が訪れる予兆なのだ。鏡王女の歌は、「風をだに 恋ふるは羨し 風をだに 来むとし待たば 何か嘆かむ」と訓じ、「風にも恋心を動かすあなたが羨ましい 訪れる人とてない私は 風だけでも来るかと待っているのに風すら吹いてこないわ」と鎌足を恨んでいる。また、壬申の乱に勝利した天武天皇の政治哲学であろう歌は

よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見つ (27番)

と解されるが万葉仮名では、「淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見与 良人四来三」と記され、よし(よく)の用字を6種(淑・良・吉・好・芳・四来)用いている。「立派な先人がよい処としてよく見て『よし(の)』といったこの吉野をよく見るがよいのだ」と多くのよいことを経験して自分で判断し、立派な行いの人と多く接してよく見習うとよいのだと自説を開陳している。

さて万葉集の歌の採録・編集作業には、天武・持統・文武朝に仕えた宮廷歌人の柿本人麻呂と万葉後期を代表する官僚歌人で聖武・孝謙・称徳・光仁・桓武朝に仕えた大伴家持(717?~785)が大きな役割を果たした。なお、天皇(大王)の呼び名は奈良時代の大学頭であった淡海三船おうみのみふねが選定した漢風諡号に従って表記する。また、天皇・皇族・貴族の系図を図1、3に示す。

万葉集は全20巻で4516首の歌が採録されている。第1巻、冒頭の歌は雄略天皇(ワカタケル大王)の作である。

籠もよ み籠持ち 掘串もよ み堀串持ち この岳に 菜摘ます児
 家聞かな 名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて われ
 こそ居れ しきなべて われこそ座せ われこそは 告らめ 家を
 も名をも (1番)

大王は、赤い装(スカート)を穿き、籠とへらをもって若菜を摘んでいる美貌の乙女に、「美しいカゴを持って 美しいへらを手にして この丘で若菜を摘む娘さんよ あなたはどこの家の娘さんかね 名は何というのかね 大空い

っぱいに広がる大和の国は すべて私が支配しているのだよ 私こそ明かそう 家柄も 名をも」と声を掛けている。武という名の剛胆な大王らしく高揚感があふれている。女性の名前と家柄を尋ねることは求婚の常とう手段である。早春の若菜摘みは、行楽の一つで雪間から萌え出てきた生命力旺盛な若菜を摘んで食べると、その生気が身に浸み込み、厄災や万病を取り除いてくれると考えられていた行事であった。現代も正月7日の七草粥として伝承されている。

この万葉集1番の雄略天皇の歌より遡った時代の歌がある。倭の五王のうち、5世紀前半の讀^{さん}または珍^{ちん}に比定される仁徳天皇(16代:オオサザキ大王)の皇后石之日^{いわのひめのみこと}荒^あ命^{いのひめ}(磐姫)が大王を慕って詠んだと伝承される4首である。

君が行き日長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ (85番)
 かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを(86番)
 ありつつも君をば待たむ打ち靡くわが黒髪に霜の置くまで (87番)
 秋の田の穂の上に霧らふ朝霞何処^{いづこ}辺^への方にわが恋ひ止まむ (88番)

「あなたがおいでになってから日数もたちましたね 山路を訪ねて迎えに行きましようか それとも待ち続けていましようか」と先ずは健気な心情を綴っている。次いで、「こんなに恋しく苦しんでいるばかりでなく 高い山の岩を枕に 死んでしまいたいものだわ」と仁徳天皇を脅迫している。でも死ねないので、「座り続けてあなたを待っていましよう 長く^{なが}靡く私のこの黒髪に霜が置くようになるまででも」と白髪になるまで待ちますわよと激しい愛を歌いあげている。そして、「秋の田の稲穂の上にかかる朝霞のように、わだかまって動かない私の恋心が晴れる場所はどこにもないのです」と本音を詠っている。これら4首の歌は、起承転結を思わせるように連続しているのは漢詩の影響であろう。この皇后磐姫の4首が万葉集に採録された歌の中で最も初期のものである。そこで万葉時代の始まりを仁徳天皇の頃とする。万葉集の最後に採録されたのは、藤原仲麻呂が^{ふじの}惠美押勝^{えみおしかつ}の美称を賜り、権勢をふるっていた頃の天平宝字3年(759年)、大伴家持^{おほとも}が作った歌である。

新^{あらた}しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重^しけ吉事 (4516番)

雪は吉祥であったことから、「新しい年の初めの新春の今日 降りしきる雪のようにいっそう重なれ よきことを」の意である。

以上のように、万葉集は神話を含む時代から口誦されていた歌を採録したもので、5世紀前半から8世紀中葉まで、即ち古墳時代後半から奈良時代に亘って詠まれた長歌・短歌・旋頭歌・東歌・防人歌などを拾遺したアンソロジーである。したがって、万葉時代を大和時代(古墳時代)後半から奈良時代、すなわち磐姫の歌から大伴家持の歌までの約350年間とする。しかし、万葉

集の成立時期を約 30 年ごとに四期に分け、

- 1) 初期万葉：大化の改新(645年)～壬申の乱(672年)までの時代。
- 2) 白鳳万葉：柿本人麻呂を代表格歌人とする天武・持統・文武天皇らの治世で、持統太政天皇が崩御(702年)するまでの時代。
- 3) 平城万葉：710年の平城遷都を含み、遣唐使がもたらした唐文明がもてはやされた頃で天平元年(729年)に長屋王が自死するまでの時代。
- 4) 天平万葉：聖武天皇が君臨し、大伴旅人、山上憶良、山部赤人、大伴家持(～785年)、そして家持の叔母坂上郎女らが活躍した時代。と分画して考えることもある。この場合、万葉時代はほぼ 120 年となる。

3. グリーンケミストリー

3.1 グリーンについて

五行説によると色には意味があり、四季に色がある。青春、朱夏、白秋、黒(玄)冬であるが、この季節の色分けは東洋人の感性をして如何にもと思わせる。五行思想の五色は四季の青(緑)、赤(朱)、白、黒(紫)に黄色が加わる。仏教で五色は青、黄、赤、白、紫であり、それぞれ如来の毛髪、身体、血液、齒および袈裟の色とされる。古来、人間は象徴色として緑には安らぎや生命力、赤には情熱や危険、青には涼しさや理知、白には潔癖さや無限、そして黒には厳肅さや孤独や死を感じてきた。また、紫は神秘の象徴であり、中国では黄色は皇帝の色であった⁹⁾。春は始まりの季節。大地は約束通り今年も花を咲かせ、木々の葉が繁茂し始める。緑は命輝く若葉色である。東洋では、情熱の赤と安らぎの緑(青)の組み合わせが好まれたようだ。実は赤と青緑は補色の関係にあり、補色同士の組み合わせは互いの色を引き立てあう相乗効果がある。

あをによし^な葺^ら楽^みの京師^{みやこ}は咲く花の薫^{にほ}ふが如く今盛りなり (328番)

大伴旅人が大宰府の長^{おさ}だったころ、次官として天平文化の花開く平城京から九州へ転勤になった小野老^{おののおゆ}が鄙^{おの}への都落ちにショックを受け、「奈良の都でなくっちゃ」と嘆いて詠んだ歌である。ここに、あをによしとは青丹よしである。青は緑色で、丹は赤色。緑の山並みに映える朱塗り柱の宮城や朱雀門が目に浮かぶ。持統天皇が藤原宮に遷ったときに詠まれた長歌に

・大和の青^{あお}香^か具^ぐ山は日の^{たて}経^{たて}の大御門に春山^{しゅん}と繁^{しむ}さび立てり
 畝^{うね}傍^びのこの瑞^{みず}山^{やま}は日の^{よこ}緯^{よこ}の大御門に瑞山^{みず}と山^{やま}さびいます耳^{みみ}成^{なり}の
 青^{あお}菅^{すが}山^{やま}は・ (52番)

「・大和の 青々とした香具山は 東の御門(宮殿)に向かって 春の山と

してうっそうと茂った姿を見せている 畝傍のこの瑞々しい山は 西の御門(宮殿)に対して瑞祥としての山の姿を見せている 耳成の青苔に囲まれた山は「・・」青はもちろん緑である。藤原宮と大和三山の位置関係は図2参照。

3.2 グリーンケミストリーと緑の党

グリーンケミストリー(緑の化学)とは、旧来の高効率・低コストを優先する化学技術に対して製品の生産から廃棄までの全サイクルにおいて、生態系に与える影響を最小限にし、かつ経済的に効率性を向上させようとする化学工業の改革運動のことである。また、サステナブルケミストリーという言葉がある。これは化学製品が生態系に与える環境負荷を軽減し、かつリサイクルによる省資源化を通じて持続成長可能な産業の在り方を提案するものである。さらに、両者を合わせた、グリーン・サステナブル・ケミストリーという言葉もある。

一方、1970年代から緑が象徴する安らぎや生命力にちなんだ「緑の党(緑の人々)」運動といわれる社会運動がヨーロッパを中心に世界各国で台頭してきた。これはエコロジー(自然保護)・反原発・反戦・人種差別撤廃・社会的弱者の人権・消費者保護・フェミニズム等の幅広いテーマについて問題を提起・解決しようとする政治勢力である。グリーンケミストリーの各論は別稿に譲り、ここでは、社会的弱者の人権の観点から万葉時代を見るにとどめる。

4. 渡来人による文化・文明の伝来

古代日本の精神的な生活にかかわる文化と技術的・物質的所産である文明、そして政治体制の形成に果たした渡来人(帰化人)の役割は大きい。本節では、渡来人が、いつ頃、どこから来て、何をもたらしたかについて概観する。

渡来人は、紀元前の弥生時代から7世紀ごろまでに、中国の易姓革命¹⁰⁾や朝鮮半島の動乱から逃れ、難民となって陸続として我が国に移住している。渡来人は、稲作の農耕、灌漑や都市計画を含む土木建築、武器や農耕具を作るための製鉄・金属加工、養蚕と機織りなどの技術とともに、漢字と仏教、医薬の知識、政治手法などの知識を我が国にもたらした。渡来人が我が国に及ぼした影響は、南北アメリカ大陸、アフリカ大陸そしてオーストラリア地域に渡来したヨーロッパ人がネイティブに与えたものとは異なる。即ち、それらの地域の国々では、ヨーロッパ人が征服者となり、英語・スペイン語・ポルトガル語・フランス語がそれぞれ国語(共通語)となってしまったが、我が国の場合は、渡来人による支配は受けず、漢語(中国語)や朝鮮半島の言葉にはならず漢字文化圏に属しているものの日本固有のやまと言葉が使われ

続けている。

4.1 秦氏と漢氏

渡来人は倭に定住するにあたり氏族としてグループ化した。代表的なグループとして秦氏はたうじと漢氏あやうじが知られている。秦氏は、多分に伝説を含むが、3世紀後半から5世紀頃に秦始皇帝の子孫で朝鮮半島の百済を経由して渡来した弓月氏ゆづきを祖とするグループであり、畿内各地に土着した。彼らは土木技術や農業技術を有していたので土地の開墾を進めたほか、養蚕・機織り・酒造・金工等の技術を發揮した。漢氏は秦氏より少し遅れて応神天皇の時代に渡来した後漢帝の曾孫ともいわれた阿智使主を祖とするグループである。「漢」を「あや」と呼ぶことから織物工芸に長けていたことが窺える。漢氏はさらに東漢氏やまとのあやうじ（倭漢氏：東文氏）と西漢氏かわちのあやうじ（河内漢氏：西文氏）の2つのグループに分けられる。東漢氏のグループは飛鳥地方に居住して製鉄・武器生産・須恵器の生産技術で貢献するとともに文書の作成と記録・外交・財政などを担当し、やまと政権に密着して活動した。飛鳥時代、蘇我氏は軍事力にも優れた東文氏と繋がることで国際的な視野を持ち、朝廷における権力の掌握ができた。一方、西漢氏は論語や千字文を伝えた百済の王仁わにを祖とし大阪府下河内地方を本拠地とするグループで文筆に優れていたので記録や出納を担当した。両漢氏はいずれも後漢から朝鮮半島の帯方郡、さらに百済を経由して大和や河内に渡来したと伝えられるが根拠はない。

4.2 半島の三国時代と倭

万葉時代の倭の文化・文明の発達は渡来人および朝鮮半島に居住する倭人の往来に拠るところを多とするので彼らの主たる源流としての朝鮮半島と我が国の関わり合いについて概観する。4～7世紀の朝鮮は三国時代といわれ、百済・新羅・高句麗の3国が鼎立しており、互いに連携と抗争を繰り返していた。古代朝鮮半島の南部には馬韓ばかん・辰韓しんかん・弁韓べんかんの三韓があり、それぞれはいくつかの部族の集合体国家であった。馬韓は百済によって統一され、辰韓が新羅に発展し、弁韓は伽耶かや（日本名は任那）諸国となり最終的には新羅に併呑された。最近、百済・伽耶・新羅地方で倭に特徴的な前方後円墳が発見されていることから一定数の倭（日本）人が朝鮮半島に居住していたと考えられる。任那には倭による南朝鮮経営のため日本府が置かれていた。三国時代には、周辺国を巻き込んだ動乱から逃れ、半島から渡来した人々が隋・唐を含む諸国の最先端の知識・技術・仏教などを倭にもたらした。

4.2.1 百濟

百濟(?～660年)の建国時期はよく分からないが夫余族(ツングース系)の高句麗の始祖朱蒙の子が建国したとされ、4世紀中頃から国際的に知られるようになった。夫余人・新羅人・高句麗人・倭人が住んでいたが夫余族が支配層と見られている。百濟は同根である高句麗としばしば軍事衝突し、高句麗19代広開土王(好太王)や息子の長寿王の時代に高句麗が優勢となった。そこで劣勢の百濟肖古王は倭と倭-百濟同盟を結び、その証あるいは軍事的援助の謝礼として神功皇后(名:オキナガタラシヒメ、14代仲哀天皇の后)の時代の4世紀後半、倭に七支刀を贈っている⁶⁾。この剣は、泰和四年(369年)の文字が金で象嵌されており、ナナサヤノタチと呼ばれる鉄製両派の剣で左右交互に3本の小枝を出し、切っ先と合わせて七枝となる儀礼用で、石上神宮(天理市)所蔵の国宝となっている。5世紀末になると百濟は新羅と百濟-新羅同盟を結び高句麗に侵攻したが、高句麗は外交努力で百濟に近づき、逆に百濟-高句麗同盟が成立して新羅に対峙した。そして、新羅が百濟の領土を脅かすようになったので倭-百濟同盟を強固なものとするため、聖明王(在位:523～554年)は欽明天皇(名:アメクニオシハラキヒロニワ;29代:～571年)にいろんな分野の博士たちを派遣するとともに仏像・仏典を献じている。しかし、660年、唐-新羅同盟の攻撃によって百濟は遂に降伏して百濟人は各地に逃げた。ところが、唐軍が撤退すると百濟の遺臣が故国に戻り、反乱を起こしたので、662年、倭は同盟国である百濟の復興を期して阿倍比羅夫を征新羅将軍とする百濟救援軍を派遣した。斉明天皇は陣頭指揮のため筑紫国朝倉宮に遷ったが現地で崩御してしまう。663年、中大兄皇子は倭水軍を再び朝鮮半島に送り、百濟再興を図ったが「白村江の戦い」で唐-新羅同盟軍に大敗したため百濟は完全に滅亡し、大量の難民が渡来して奈良や琵琶湖周辺に居住した。倭は九州北部に水城の築造や防人の増強などをして、唐-新羅同盟軍の侵攻に備えた。

4.2.2 新羅

新羅(前57頃～935年)は、3世紀頃にあった辰韓十二国の一つで慶州に建てた斯盧国が発展し、4世紀中頃に国家の態をなしたが小国であったため百濟や倭が脅威であった。新羅は高句麗の属国となっていた5世紀中頃から独立を目指して百濟-新羅同盟を結び高句麗と戦った。しかし、伽耶の領有をめぐる百濟に対抗したので百濟-新羅同盟は解消する。このとき、百濟-高句麗同盟が結ばれたため、新羅は隋に続いて興った唐と唐-新羅同盟を結び、百濟-高句麗同盟に対抗した。

663年、百済が白村江の戦いに敗れて滅亡し、次いで668年、高句麗も唐軍によって滅亡したので新羅は朝鮮半島全域を手中に収めた。倭は壬申の乱(672年)に勝利した大海人皇子(天武天皇)が親新羅政策を取り、続く持統天皇も新羅からの朝貢を受け入れた。孝謙天皇の天平勝宝4年(752年)、新羅からの朝貢品には奈良の大仏建立に必要な大量の金が含まれていたと推定されている。

8世紀中頃、新羅は飢饉や疫病のため社会が疲弊したので多くの新羅人が倭に渡来した。やまと王権は彼らを帰化させ、下野国や武蔵国など東北地方や美濃国に居住させた。8世紀終盤にも新羅国内が混乱したので、さらに多数の難民が日本列島に渡来・帰化している。記紀^{6,12)}には、天之日矛(天日槍)伝説がある。古事記では応神天皇の項(天之日矛)、日本書紀では垂仁天皇の項(天日槍)に述べられているがストーリーは若干異なる。天日槍は、新羅の王子であったが、祀るべき神としてもらった白い石が変化して出てきた乙女(妻)が倭の方向に逃げ帰ってしまったので、王位を弟に譲って倭に来て帰化し、但馬(兵庫県豊岡)の太耳の娘麻多鳥を娶って土着したという。

4.2.3 高句麗

高句麗(前37～668年)は中国東北部南部から朝鮮半島の北中部にあったツングース系民族の夫余の朱蒙が建てた国で、後漢始祖光武帝(在位25～57年)、次いで曹魏に朝貢しており、さらに355年には五胡十六国の一つ前燕に冊封されている。日本書紀には神功皇后が新羅を攻略して凱旋したという三韓(この場合は新羅・百済・高麗の3国)征伐の記述がある。三韓は倭に降伏して、「西蕃(未開の異民族)と称して朝貢を絶やしません」と述べたという。この記述は伝説的要素が強い。確からしいのは、倭は391年、朝鮮半島に侵攻して百済と新羅を支配下に置いたが、新羅が高句麗に救援を求めたので、400年には広開土王の高句麗軍が新羅と共に百済に進軍して倭軍を撃退したようだ。この戦功が広開土王碑(414年建立：中国吉林省)に記されている。我が国では、碑文の一部を、「4世紀末(391年)に、倭が海を渡り(高句麗の)属民であり朝貢していた新羅や百済を攻め臣民としてしまった」と解釈するが、韓国・北朝鮮では、倭の半島への侵攻を認めず解釈が異なる。いずれにしても倭は渡来人を受け入れるだけでなく外征するほどの国力を持っていたことが分かる。高句麗は隋(581～619年)の4度に亘る侵攻に抵抗してこれを撃退した結果、隋は国力が消耗して滅び、李淵(高祖)の唐(618～907年)が興った。白村江の戦いで百済が滅亡したので百済-高句麗同盟は崩壊して高句麗は孤立した。唐第3代皇帝高宗の668年、平壤に都をおいていた高句麗は唐-新羅同

盟軍に敗れ滅亡する。このとき多くの遺民が倭に逃れて渡来・定住したので、日本各地に高麗・巨摩・狛の地名が残っている。

4.3 遣隋使・遣唐使

前述のように倭と中国大陸との通行は古く、1～2世紀の倭奴国と後漢、3世紀前半の邪馬台国と魏の通航を経て、5世紀前後の応神天皇ら倭の五王による南宋への朝貢以来、約100年ぶりに冊封を受けていない独立国倭は遣隋使を派遣した。飛鳥時代の推古15年(607年又は推古16年)、推古天皇は大陸の文化・技術・制度の吸収を目的に隋の皇帝煬帝宛の国書を小野妹子に持たせ、留学生の高向玄理、受(僧)、南淵請安らを派遣して最新の中国文化の受け入れを始めた。推古27年(619年)、隋が滅び、唐が建ったので遣隋使は舒明2年(630年)から遣唐使となった。初回の遣唐大使は、614年に遣隋使として派遣された経験を持つ犬上御田歙で留学生・乗組員たち400～500人が往復した。この復路で遣隋使であった僧旻が帰国したが、高向玄理と南淵請安は32年間、大陸に滞在して隋の滅亡から唐の建国の過程を見聞し、舒明12年(640年)に帰国した。高向玄理は僧旻と共に国博士として大化の改新の政策立案に携わっている。

白村江の戦いの後も倭と唐の関係修復を目的に遣唐使は派遣されていたが、壬申の乱(672年)の混乱と律令国家確立に専念したため天武天皇の時代に途絶えた。しかし、天武天皇の大室2年(702年)に遣唐使を再開して山上憶良を送っている。その後も、元正天皇の養老元年(717年)には阿倍仲麻呂・吉備真備・玄昉(僧)を入唐させ、聖武天皇の天平5年(733年)と孝謙天皇の天平勝宝4年(752年)にも遣唐使を派遣している。

遣隋使・遣唐使は、中国の書物・寺院の設計図・墨・仏像・農産物など多様な文物の輸入と並んで多岐に亘る技術者を連れてきている。さらに、中国を経由して西域や遠くペルシャやギリシャの文化・文明を倭にもたらした。その結果、倭では産業が興るとともに、政治形態の変革による中央集権国家が成立した。美術の観点から見ると、7世紀末～8世紀初頭の貴人の墓であろう高松塚古墳やキトラ古墳に描かれた極彩色の美人像、中国の四神(天の四方を司る霊獣で、北方玄武・南方朱雀・東方青龍・西方白虎)、そして星宿(星座)の壁画は唐文化の移入の証拠である。また、7世紀後半の白鳳期に建立された薬師寺金堂の薬師如来の台座の上部にはギリシャの葡萄唐草文様とペルシャの蓮華文様が見られ、下部には中国の四神が描かれており、支えているのはインドの神々である。

大伴家持が遣唐使に捧げた歌がある。

梳くしも見じ屋中やめちも掃はかじ草枕くさまくし旅行りょく君きみを斎いはふと思もひて (4263番)

「櫛も手にすまい 家の中も掃くまい 草を枕に旅するあなたを(私は)身を慎んで祝福しようと思って」古代では、旅行者の無事を祈って、関係者は身なりを整えない、肉食をしない、女性と交わらないことを心掛けたという。

5. 万葉時代概観

本章では、古代日本のグリーンケミストリーを論じるに先立って、万葉時代を大和時代、飛鳥時代、藤原京時代、奈良時代に区分し、天皇(大王)ごとに政治的・文化的な事象について関連する万葉集の歌とともに概観する。

5.1 大和時代

前方後円墳など墳丘墓が造られ、律令国家が成立する以前の大和および大和を中心とする畿内を本拠とするやまと王権が存在した250年頃～500年代末頃までを大和時代とする。古墳時代と重なるこの時代は、農耕や大規模土木工事が行えるぐらいに鉄製工具(器具)が普及し、鉄製武器によって全国平定のため大王が活躍した英雄の時代である。

5.1.1 応神天皇

350年頃には、やまと王権は国内を統一したとされるが、倭は大王を中心とした各地の豪族(各地の王)の連合国家であり、氏姓制度で秩序が保たれていた。応神天皇(名：ホムタワケ、15代)は、4世紀末、神功皇后が新羅を攻略して凱旋したときに筑紫国で生んだ皇子とされる実在したであろうホムタワケ大王である。神功皇后・応神天皇の頃の倭と百済・新羅・高句麗との連携と抗争が広開土王碑に記されているのである。5世紀には倭の五王が各地の小国を支配下に組み込んでいる。

5.1.2 仁徳天皇

古事記の仁徳天皇(名：オオサザギ、16代：倭の五王の讚あるいは珍)の項によると、5世紀前半に存在したであろうこの天皇は、「**国の中に 烟うち発けむりた ず 国皆貧窮みなまずし 故かれ 今より三年に至るまで 悉ことごとく人民おおもたの課役えつきを除け**」と社会的弱者の救済を意図した仁政を布いたほか、日本最初の大規模土木事業として難波津の整備、低地である河内平野の水害を防ぐための掘削と茨田堤(寝屋川市)の築造、山背(京都府)地方の灌漑用水路の掘削などの公共事業を行っている。

仁徳天皇の御製は万葉集にはなくて古事記に採録されている。天皇は好色

で吉備の海部直の娘黒日売の容姿が気に入って召し上げ、妃(皇后に次ぐ地位の女性)にしたものの、彼女は皇后磐姫の嫉妬に耐えられず吉備に帰ってしまう。黒日売が乗った船が海に出て浮かんでいるのを高殿から遥かに見やうて天皇が詠んだ歌では、

沖方には小船連らく黒鞆のまさづ子我妹国へ下らす

「沖の方には小船が並んでいるよ いとしい私の妻が故郷の国へ下って行かれるのだ」と嘆いている。そして、天皇は未練断ち難く黒比売への思慕が募り、皇后を騙してはるばる吉備まで行幸した。再会を果たしたのち天皇が大和に還幸するとき、黒日売が奉じた歌が2首ある。

倭方に西吹き上げて雲離れ退き居りとも我忘れめや

倭方に行くは誰が夫隠り処の下よ延へつつ行くは誰が夫

「大和の方へ 西風が吹き上げて 雲が離れ離れになるように 遠く隔てておりましたとも 私は忘れなどしません」とか、「大和の方に帰っていくのはどなたの夫かしら (離れていても)ひそかに心を通わせて行くのは 私の夫なの」と思いを通わせている。ところが、多情な仁徳天皇は皇后が紀伊国に行啓している間に天皇の異母妹である八田若郎女(八田皇女)を娶ってしまっている。皇后磐姫は、上掲の起承転結で詠んだ85~88番の歌で吐露した天皇への熱い思いは失せて、ついに堪忍袋の緒が切れた。

つぎふねや山城河を宮上り我が上ればあをによし奈良を

過ぎ小楯倭を過ぎ我が見が欲し国は葛城高宮我家の辺

「山代川を 宮を通り過ぎて遡り 私が上って行くとなら過ぎ大和を過ぎ私が見たいと思う国は その先にある葛城の高宮 私の生家のあたりなの」と詠んで、里に帰ってしまった。

5.1.3 雄略天皇

万葉集の冒頭の歌を詠んだ雄略天皇(名:オオハツセワカタケル、21代:倭の五王武)は、478年に宗主国であった南宋へ上奏文を送って冊封され、大陸から多くの技術者とともに最新の文化・技術・資源を輸入しているのので、この時代は明治維新に相当する「万葉維新」の時代といっても過言ではない。

昭和53年(1978年)、獲加多支鹵と金象嵌された鉄剣が埼玉稻荷山古墳から出土していることは、全国平定のために鉄を輸入して韓鍛冶(やまと王権に仕えた渡来系の鍛冶集団)に武具や馬具を製作させていたことを示している。鉄製武器の生産に拍車がかかった富国強兵の時代であった。一方、渡来系の機織り技術者である漢織や呉織を招へいして養蚕業を奨励していることは、明治5年に群馬県に設立された富岡製糸場の時代背景を彷彿とさせる。この

ように、明治維新後の日本が怒濤の如く流入した西洋の文化・文明によって変革したように万葉時代初期は先進的な大陸の文化・文明が直接あるいは朝鮮半島を経て輸入され、急速に文明開化・殖産興業が起こった時代である。

5.1.4 継体・欽明天皇

527年、継体天皇(名:オホド、26代:在位507?~531?年)のとき、新羅の攻撃を受けた百済(南加羅など)を救援のために倭軍を九州北部に送ったが、新羅と内通したともいわれる筑紫国の国造(国の御奴)の磐井(石井)が反乱を起こした。継体天皇は物部麁鹿火大連を派遣して反乱を平定している。

継体天皇の嫡子である欽明天皇(名:アメクニオシハラキヒロニワ、29代:在位?~571年)の538年(日本書紀では552年)には、新羅に脅かされていた百済の聖明王の使者が釈迦如来像や経典などを献上して仏教が公伝している。金ぴかの仏像を伴って渡来した異国の神と古来の倭の自然信仰(原始神道)の神との文化ギャップは大きかったようだ。渡来人は以前から仏教を信奉していただろうが、この金ぴかの仏像の到来は江戸幕府末に来航したペリーの黒船4隻に匹敵する事態であった。そして起ったやまと王権の主導権争いが絡んだ崇仏・廢仏論争は、欽明天皇と厩戸皇子(聖徳太子)の支援を受けた崇仏派の蘇我(稲目・馬子親子)氏と廢仏派の物部(尾輿・守屋親子)氏の天下を揺るがす蘇我・物部の戦争の発端となった。

5.2 飛鳥時代¹¹⁾

奈良盆地東南部の飛鳥地方は、6世紀末から平城京遷都(710年)までたびたび都となった地である。飛鳥時代は推古天皇が豊浦宮で即位した592年から持統天皇が藤原京へ遷宮した7世紀末までとする。飛鳥の地には、豊浦宮(推古朝)・小墾田宮(推古・皇極朝)・岡本宮(舒明朝)・板蓋宮(皇極・斉明朝)・川原宮(斉明朝)・飛鳥浄御原宮(天武・持統朝)ほかが営まれていた。飛鳥時代は我が国の行政機構の整備や税制度の確立など生活の基本が整った時代である。

5.2.1 敏達・用明・崇峻・推古天皇

欽明天皇の没後、彼の皇子が敏達天皇(名:オサダノヌナクラノフトタマシキ、30代:在位572~585年)として即位した。皇后は異母妹の額田部皇女(後の推古天皇)である。敏達天皇が天然痘で崩御したあと蘇我馬子が推す敏達の異母弟が用明天皇(名:タチバナノトヨヒ、31代:在位585~587年)として即位したが彼もまた間もなく同じく天然痘で崩御してしまった。用明天皇の

皇后は穴穂部間人皇女あなほべのほしひとのみめみこで厩戸皇子(聖徳太子)をもうけている。蘇我馬子は次期天皇として欽明天皇の二人の子の兄はつせの泊瀬部皇子を推し、一方、物部守屋は弟あなほべの穴穂部皇子を推挙した。兄弟による後継者争いである。用明3年(587年)、蘇我馬子は額田部皇女や厩戸皇子を味方に引き入れ、穴穂部皇子を殺害し、物部氏を滅ぼしてしまう。この戦で兄の泊瀬部皇子が崇峻天皇(名:ハツセベ、第32代:在位587~592年)として即位し、崇仏論争も決着した。しかし、崇峻天皇は政治の実権が蘇我馬子に握られていることが不満で、兵を召集したが逆に馬子側に暗殺されてしまう。蘇我馬子は敏達天皇・用明天皇・崇峻天皇・推古天皇の4代に仕え、蘇我氏の全盛時代を築いた。蘇我稲目に始まり、馬子、蝦夷、入鹿と続く蘇我氏については遠山美都男の「臣、罪を知らず 蘇我氏四代」に詳しい¹³⁾。

馬子は崇峻天皇の後継に額田部皇女を推古天皇(名:トヨミケカシキヤヒメ、第33代:在位592~628年)として豊浦宮で即位させた。推古天皇は、小墾田宮に遷って厩戸皇子を摂政として、1)冠位十二階の制定や2)十七条憲法の作成などの革新的な政治を行ったほか、3)各地の有力豪族らを国造として地方行政の確立を図った。また、4)「仏教興隆みことりの詔」を発して、仏教信仰を始動させている。日本書紀によれば、用明2年(587年)、蘇我馬子の発願によって我が国初の1塔3金堂を備えた本格的な瓦葺きの寺院である飛鳥寺(法興寺)の造営が始まっている。造営は百済系渡来人がもたらした最新の建築技術に抛り、推古4年(596年)、田園風景の中に超高層建築の五重塔が完成した¹¹⁾。また、厩戸皇子は推古15年(607年)に法隆寺、623年頃までに四天王寺を創建している。鞍作止利は飛鳥寺の本尊の釈迦如来座像(飛鳥大仏)や法隆寺金堂の釈迦三尊像を作って納めている。外交面では、推古15年、小野妹子を隋に派遣して国家の安定を図りながら、隋の先進的な文化・文明の導入に大いに力を注いだ(4.3項参照)。

5.2.2 舒明天皇

36年間の長期に在位した推古天皇の崩御後、蘇我蝦夷の推薦で敏達天皇の皇子である押坂彦人大兄皇子おしきかのひことおおえの第1皇子である田村皇子が舒明天皇(名:オキナガタラシヒヒロヌカ、34代:在位629~641年)として飛鳥岡本宮で即位した。舒明朝では外交面で見るとべきものがあり、隋(581~619年)が滅んで唐が建ったので、舒明2年(630年)、犬上御田いぬのかみのみたすき鎌を大使とする遣唐使を唐に派遣している。遣唐使によって、唐風文化の輸入が進むとともに大陸および朝鮮半島からの技術者を含む多くの渡来人が渡ってきた。蘇我蝦夷に政治の実権を奪われながらも頑張った舒明天皇が国見をしたとき、宮廷歌人が詠んだ

国褒めの長歌がある。

大和には群山あれどとりよるふ天の香具山登り立ち国見をすれば
 国原は煙立つ立つ海原は鷗立つ立つうまし国そ蜻蛉島大和の国は(2番)

「大和には多くの山があるが 草木が繁茂して立派に装った 香具山の頂上に上り 国見をすると陸地には炊煙がしきりに立ち上り 海上には鷗が飛び続けている 美しい国だなあ蜻蛉島 大和に国は」蜻蛉は豊作の象徴であり、大和三山の香具山では豊作を祈願する天皇の国見が行われていた。

5.2.3 皇極・孝徳天皇

舒明天皇の崩御を受けて、皇后宝皇女が皇極天皇(名:アメトヨタカライカシヒタラシヒメ、35代:在位 642~645年)として即位した。この時代も蘇我蝦夷・入鹿親子が権力を握り、国政を執っていたが、皇極天皇は従来の政治を踏襲しながら百済大寺を建立するなど推古天皇が始動した仏教興隆に尽くした。蘇我氏の支配は、入鹿に至って、蘇我氏系の古人大兄皇子を皇極天皇の後継とするべく厩戸皇子の子山背大兄王を攻め斑鳩寺で一族もろとも自殺させるなど横暴を極めた。しかし、その栄華も皇極4年(645年)、飛鳥板蓋宮で中大兄皇子や中臣鎌足ら起こしたクーデター「乙巳の変」で入鹿が暗殺され、蝦夷も自刃して終焉を迎えた。逆賊とされた蘇我宗家の人たちの歌は万葉集にはない。

乙巳の変を受けて皇極天皇は同母弟の軽皇子に譲位して孝徳天皇(名:アメヨロズトヨヒ、36代:在位 645~654)が誕生した。日本史上初の譲位である。政治的配慮から皇太子は甥の中大兄皇子とし、皇后は姪で中大兄皇子の妹間人皇女とした。また、蘇我倉山田石川麻呂の娘遠智娘と阿倍内麻呂の娘阿倍小足媛を妃としている。阿倍小足媛は万葉時代の悲劇の主人公である有間皇子¹⁴⁾をもうけている。

孝徳元年(645年)、初めて元号「大化」を立て、大化2年には「改新の詔」を宣して大化の改新と呼ばれる各分野での諸改革を行い、中央集権制の確立を目指した。しかし律令国家の形成には次代の天武・持統両朝における改革が必要であった。「改新の詔」は、1)私有地・私有民の廃止、2)国・郡・里制による地方行政権の朝廷への集中、3)戸籍の作成と耕地の調査による班田収授法の実施、4)租・庸・調などの税制の統一の4項目からなる。ここに、租である米は、国衙(地方にある国の役所)の正倉に蓄えられ地方の主要な財源となった。庸は都での労役の代納物として納められた布・綿・米・塩などをいい一種の人頭税である。調は正丁(21~60歳の男)・次丁(61歳以上の男)に賦課された現物納租税で繊維製品・海産物・鉱産物など各地の産物を徴収

太子(中大兄皇子)は飛鳥に戻ることを進言したが孝徳天皇はそれを拒否したため、皇太子や皇后はしひと間人を初め、公卿・百官が飛鳥に遷ってしまう事態に到り、天皇は悲嘆の内に654年、崩御した。

5.2.4 齊明天皇

孝徳天皇の没後、62歳の皇極天皇ちとうそが重祚して齊明天皇(37代：在位655～661年)となった。彼女が即位した飛鳥板蓋宮が石敷きの王宮であり、3平方キロメートル程度の都に酒船石・亀石・須弥山石・石人像・マラ石・猿石と呼ばれる石の構造物を配置したことから「石の女帝」と呼ばれる。須弥山石(高さ2.8メートル)や石人像(高さ1.7メートル)は地下水路を利用した噴水設備である。宮殿の庭園で催された酒宴には、やまと王権の力を国内外にアピールするため、東北地方えみしや九州南部はやひとの隼人など異民族視された倭の人々、そして外国からは朝鮮半島・中国・中央アジア・インドからの賓客が招かれたことであろう。また、天皇は石で護岸した水路を造成するなど盛んに土木工事を興したので「狂心の天皇」とも言われた¹⁵⁾。

飛鳥板蓋宮と同様の石敷きの宮殿は、百済の都であった益山市イクサン チョルラ(全羅北道)の王宮跡ワングンニにもあり、飛鳥で見えるような石造物(石人像)も残されている。また、飛鳥で発掘された水道施設としての土管が百済遺跡からも出土している。この飛鳥遺跡と百済遺跡の一致は、齊明天皇が百済から渡ってきた技術集団(石工達)に百済の都に倣って寺院や石の都を造らせた結果と考えられる。齊明天皇の歌を挙げておこう。齊明4年(658年)紀伊国の牟婁温泉むろに行幸したとき

君が代もわが代も知るや磐代いわしろの岡の草根くさねをいざ結びてな (10番)

「あなたの命も私の命も支配していることよ この磐代いわしろの岡の草を さあ結びましょう」と詠った。無事(寿)を祈って磐代いわしろの岡の草の葉を結ぶ習慣一草の葉を結ぶ行為にその人の命が結びこまれるとする古代信仰一があったのであろう。この歌の後、孝徳天皇の子の有馬皇子は次期天皇の有力候補と見做されたために謀反いたの疑いで逮捕され、牟婁温泉まで護送されている。その往路で自らいたを傷み、

磐代いわしろの浜松が枝を引き結び真ま幸さきくあらばまた還り見む (141番)

「磐代いわしろの浜松の枝を結びあわせて道中の無事を祈るが もし(幸いにも)命があつて帰路にまた通ることがあれば この松を見たいものだ」と哀感を込めて詠んだが、中大兄皇子の厳しい尋問を受け、帰途、藤白坂で絞殺されている¹⁴⁾。

皇太子(中大兄皇子)が初めて漏刻(水時計)を作った齊明6年(660年)、百

済は唐一新羅同盟軍によって滅亡した。しかし遺臣が祖国再興を期して立ち上がったので、翌年、68歳の齊明天皇は同盟国百濟再興を支援するため自ら倭軍を西に進めて伊予国の熟田津に至った。朝鮮半島に出陣する兵士に向けて随行の額田王が齊明天皇に代わって詠んだとされる歌が、

塾田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（8番）
であり、「塾田津で出帆しよう」と月を待っていると 潮目もよくなった さあ漕ぎ出せ」と全軍に号令をかけ鼓舞した。しかし、同年、齊明天皇は筑紫国朝倉宮で崩御してしまう。

5.2.5 天智天皇

中大兄皇子は齊明天皇の崩御を受けて天智天皇(名:アメミコトヒラカスワケ、38代:在位668~671年)として都城を近江国大津宮に移し、即位した。天皇在位は3年間にすぎないが、蘇我氏の国政壟断を阻止した乙巳の変後に即位した叔父の孝徳天皇、次いで母の齊明天皇の皇太子となって約23年間、国政の実権を握り革新政治を推し進めた。齊明天皇が筑紫で崩じたため、即位式を挙げないまま天皇としての政務をとっている。これを称制という。そのため、天智元年は齊明天皇崩御の翌年の662年となる。長期に亘る皇太子・称制の期間に、乙巳の変で大功を立てた股肱の臣中臣鎌足とともに、1)日本初の戸籍である庚午年籍の作成、2)近江令の制定、3)辺境の東北地方における柵(城郭)の設営など多くの業績を残した。中臣鎌足が天智天皇から賜った鏡皇女に贈った歌と鎌足に下賜された采女を娶ったときに、喜んで天皇に奉った返礼歌がある。

玉くしげみむまど山のさな葛さ寝ずはつひにありかつましじ(94番)
われはもや安見児得たり皆人の得難にすといふ安見児得たり(95番)

「玉くしげを明けてみる みむまど山(三室戸山)のさな葛のような共寝をしないでいることは 私にはできないだろう」鎌足が鏡皇女に夜這いしたときに贈った歌であるが玉は美称、くしげは櫛(即ち大切なもの)を入れる箱である。また、采女は郡司の子女から形容端正しき者として選ばれて天皇の後宮に仕えた女官で、采女との結婚は臣下には許されなかったのに娶ることができた。「私は安見児を手に入れることができたぞ 宮廷の人たちが皆思いをかけても遂げられなかった 安見児を娶ることができたぞ」と嬉しさが溢れている。天智8年(669年)、天智天皇は中臣鎌足の死に臨み、彼の功績を讃えて藤原姓を与えている。因みに、鎌足の子藤原不比等の母は、天智天皇に召され寵愛された後に下賜された鏡王女であるため、不比等には天智天皇実父説がある。不比等は持統朝以後の皇親政治を担い、政権の中心に君臨する

ことになる。大いに政治的手腕を発揮した有能な天智天皇(中大兄皇子)は大和三山の争いに託して恋の歌を詠っている。

香具山は畝傍を愛しと耳梨と相あらしひき神代よりかくに

あるらし古昔も然にあれこそうつせみも嬌をあらそふらしき (13番)

「香具山(女)は畝傍山(新たに現れた男)を男らしい者として心移りして古い恋仲の耳成山(男)と争った 神代からこうであるらしい昔もそうだからこそ今も愛する者を奪い合うらしい」この1女2男の物語には返歌がある。

香具山と耳梨山とあひし時立て見に來し印南国原 (14番)

「香具山と耳梨山とが争ったときに 阿菩の大神が立ち上がって見に来た印南の国原よ」この返歌については、播磨風土記¹⁶⁾揖保の項に、「・・出雲の国の阿菩の大神 大倭の国の畝傍・香山・耳梨の三つの山相闘ふと聞きたまふ 此に諫め止めむと欲して 上り来ましし時に 此处に到るすなわち 闘ひ止むと聞かして・・」(出雲の国の阿菩の大神が大倭の国の畝傍・香具山・耳成の三つの山が闘いあっているとお聞きになった そこで意見をして止めさせようと思い 上ってこられたとき ここに着かれるや否や闘いが止んだとお聞きになり)とあって、阿菩の大神が三山争いの調停に来たと述べている。天智天皇の1女2男の歌は、弟大海人皇子の寵愛を受けた額田王に天皇が横恋慕してついには妃としてしまったことを詠っている。尤も、この歌は天智天皇と孝徳天皇との間に起った間人皇女(天智天皇の同母妹で孝徳天皇の後)を巡る争いの歌物語の一首ともされる。一方、天智天皇によって引き裂かれた額田王と大海人皇子がそれぞれ詠った歌は次の2首である。

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る (20番)

紫草のにはほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも (21番)

天智7年(668年)、天智天皇が蒲生野(滋賀県南東岸)で粟草狩りをしたとき、「茜色を帯びる紫の(群がって咲いている)草野を行き 御料地の菜園を歩きながら野の番人は見ていないでしょうか あなた(大海人皇子)が袖をお振りになっておられるのを」と元妻の額田王が詠んだ。それに応えて、大胆な大海人皇子は、「紫草の匂うように美しいあなたが憎らしかったら 人妻なのに 私はどうして恋ひ慕うことができるか」と未練をこめて告白している。なお、天智天皇の危篤のとき、皇后倭姫王(倭太后)が病氣平癒を祈って詠んだ歌は、

天の原振り放け見れば大君の御寿は長く天足らしたり (147番)

「(天皇の居場所である)広々とした空を見ると 大君(天智)の御命は長く空に満ち満ちていることよ」この頃、大海人皇子は、「倭姫王が後継として即位し、大友皇子(天智の子)が太政大臣として摂政を取るべき」と進言したとい

う。そうなれば、壬申の乱¹⁶⁾は起こらなかつたかもしれない。

5.2.6 防人の歌

大化の改新の進行中、白村江の戦が起こった。斉明7年(661年)の斉明天皇の筑紫遠征に続いて、百済再興を図って倭は第2次派遣軍を派遣し、さらに天智2年(663年)にも阿倍比羅夫を将軍とする第3次派遣軍を送ったが倭一百済の同盟軍は白村江で唐一新羅同盟水軍に大敗を喫し、百済は滅亡する。倭は同盟国を失って朝鮮半島での足掛かりを失い、孤立した。そのため、天智3年(664年)、唐一新羅同盟軍の侵攻に備えて大宰府防衛の水城を造り、対馬・隠岐・筑紫の諸国に防人を配置し、各地に烽火を置いて国防に努めた。以前から、北部九州には防衛のために兵士が配備されていたが、白村江の戦い後、防人が兵役の一つとして制度化された。屈強な防人は東海道の諸国(遠江・駿河・甲斐・相模・安房・上総・下総・常陸)や東山道の諸国(信濃・上野・下野・武蔵)から徴発された。数多い防人の歌から少し挙げておこう。

畏かしこきや命みこと被かり明日あすゆりや草かがむた寝いむ妹いむなしにして (4321番)

父母ちちが頭かき撫なで幸さいくあれていひし言こと葉はぜ忘れかねつる (4346番)

韓から衣ごらむすそ裾すそに取りつき泣なく子こらを置おきてそ来まのや母おもなしにして (4401番)

防人ぼうえんに行くは誰たが背せと問とふ人ひとを見るが羨あましさ物もの思おもひもせず (4425番)

今日けふよりは顧かえりみなくて大君おほきみの醜しこの御み楯たてと出でて立つわれは (4373番)

国々くにの防人ぼうえんつどひ船ふね乗りて別わかれを見ればいともすべ無し (4381番)

筑紫ちくし辺へに舳へむ向むかる船いづつの何いつ時つかしかも仕まつへ奉くりて本郷くにに舳む向かかも(4359番)

防人の任務を命じられた人は、「畏れ多い命令を頂いて 明日からは草と共寝するのだろうか 妻もなくて」と嘆いている。「ゆり」はヨリと同じ、「草」や「妹」はそれぞれカヤやイモというところを詠っているのは東北地方(天竜川のあたり)の出身らしい。「父母が頭を撫でて 無事で居れよといった言葉が忘れられないよ」とも詠っている。「幸くあれて」はサキクアレトの、「言葉ぜ」はコトバゾの静岡県(遠江国)の詠である。また、「韓衣の裾にすがって泣く子を残して来たんだ(死んで)母もいないのに」と家族を残して出征する兵士の心情が伝わってくる。「韓衣」と「来のや」はそれぞれカラコロモとキヌヨ(正しくは「来ぬるよ」)の長野県内の詠り。そして、「防人に行くのはどなたの夫ですかと声をかけている人を見るのが羨ましいよ 何も思い煩うこともしないで」と妻は恨み言を詠んで、防人の男は、「今日からは思い残すことなく天皇の屈強な御楯の末になろうと 出発する私は」と悲壮な決意を詠んでいる。醜には頑強の意がある。東北・東山道の各国から難波津に集められた防人たちを詠んだ歌から、「各国の防人が集まってきて船に乗り

今別れて往こうとしている それを見ると 悲しみは払いようもない」と切迫した光景が浮かぶ。そして九州に向けて出征し、「筑紫の方に船先を向けた船は いつの日に(大君に仕え奉って)任務を果たして故郷に船先を向けるのだらう」と先行きの不安を詠っている。「^へ舳^む向^かる」はムケルの、「舳向かも」はムカムの詠。防人の歌は故郷を離れる辛さ、旅の辛さ、家に置いてきた妻子を思い哀愁を漂わせる歌が多い。兵役はいつの時代でも決して喜んで往くべきものではない。

5.2.7 天武天皇

大海人皇子は東宮(皇太子)であったが、天智天皇は我が子に皇位を継がせる意図があったのか大友皇子¹⁴⁾を太政大臣に任命した。太政大臣は国政を総覧する官職であり、東宮の職掌と重なる。この事態に身の危険を感じ取った大海人皇子は、天智天皇が崩御する前に出家剃髪して、妻の^{うののさくら}鸕野讃良皇女(天智天皇と遠智娘の第2皇女で後の持統天皇)や皇子たちを連れて吉野に逃れた。天智天皇が天智10年(671年)に崩御すると大友皇子が後継に立った(明治3年に弘文天皇と追諡)。しかし翌年、大海人皇子は挙兵して、大友皇子を自殺に追い込んだ。「壬申の乱」である¹⁷⁾。大海人皇子は、国を2分する壬申の乱に勝利し、多くの有力氏族が滅亡したのちの673年、飛鳥浄御原宮で天武天皇(名:アマノメナハラオキノマヒト、40代:在位673~686)として即位した。八色の姓で氏姓制度の再編を行って、中央集権的な律令国家体制を整備し、専制君主として君臨した。天武朝末には、従来の統治者の称号である^{おおきみ}大王や^{あめのしたしらしめすおきみ}治天下大王に代わって「天皇」が採用されている。天武天皇は白村江の戦以後、親新羅政策を取り、唐からは遠ざかっていたものの唐を強く意識して、天武5年(676年)、中国制都城を倣った藤原京の建設を開始し、宮廷儀礼も唐風の作法に改めている。例えば、官僚たちは跪いていた拝礼を立礼に変えたり、服は丸首からVゾーンのあるものに、そして髪形もミズラから^{まげ}髷に変えている。また、外交的配慮から日本書紀や古事記の編纂を開始している。稗田阿礼が誦習して太安万侶が撰録した古事記は和銅5年(712年)に元明天皇に献上され、舎人親王らが撰録した日本書紀は養老4年(720年)に元正天皇に献上されている。

天武天皇を神と讃えて詠まれた歌がある。

^{おおきみ}大君は神にし^ま坐せば^{はらば}赤駒の^{たみ}葡萄ふ^{たみ}田井を都となしつ (4260番)

^{おおきみ}大君は神にし^み坐せば^{みぬま}水鳥のすだく^{みぬま}水沼を都となしつ (4261番)

「大君は神でいらっしやるので 赤駒が腹這う田圃を都としてしまわれた」そして、「大君は神でいらっしやるので 水鳥が鳴き騒ぐ沼地を都としてしま

われた」と崇^{あが}めている。政治的手腕に優れた天武天皇が妃である藤原夫人(中臣鎌足の娘^{いおえのひめ}五百重媛)と洒落た歌を交わしている。

わが里に大雪降り大原の古りにしりに落^{おち}らまくは後 (103番)

わが岡の霧^{おかみ}に言ひて落^{おち}らしめし雪の摧^{くだ}けし其^{そこ}処に散りけむ (104番)

天武天皇が、「わが飛鳥浄御原の里には(瑞祥の)大雪が降っている(同じ飛鳥の地でもお前のいる)大原の古びた里に降るのはもっと後だろうな」と夫人の実家がある大原の里は古びているとからかったが夫人は、「(いえいえそうではありませぬ)私の里の龍神に言い付けて降らせた雪の砕けたかけらがそちらに散ったのでしょうかよ」と当意即妙に応じた。

5.3 藤原京時代

天武天皇が藤原不比等の計画に従って建設を開始した条坊制の藤原京(橿原市)は、中国の神仙思想を取り入れた都で、藤原宮を耳成山(北)・畝傍山(西)・天香具山(東)の大和三山の中央に位置する日本最古の都城であり、持統天皇・天武天皇・元明天皇(在位 707~715年)の3代16年間、倭(日本)の首都であった。藤原京時代は、神話や伝承によって秩序が保たれているのではなく、大化の改新で始まった律令制の古代国家が確立していく時代であり、天皇を中心として伝統的な貴族層が政権の中核にいて国家を運営した。また、藤原京では、各地から地方文化が持ち込まれるとともに宮廷文化が育ち、都市文化が始まっている。

5.3.1 持統天皇

天武天皇は天武15年(朱鳥元年:686年)に崩御した。このとき、皇后讚良が詠んだ歌は、

神山にたなびく雲の青雲の星離れ
行き月を離れて (161番)

「(天武陵である)神山にたなびく雲は青雲の中の星からも離れ 月をも離れて去って行っていったことよ」と嘆いているが、天皇の崩御の後、皇后讚良は皇太子の草壁皇子を後継に立てることなく、称制をとり、皇太子とともに政務を執っていた。しかし、689年、残念なことに草壁皇子が病死してしまったため、持統天皇(名:タカマノハラヒロノヒメ、41代:在位 690~697年)として即位した。これは草壁皇子と阿閩(阿倍)皇女

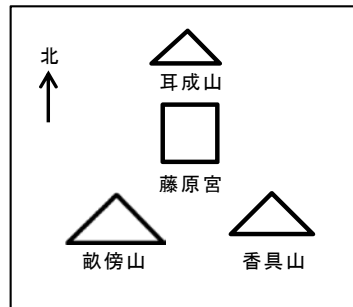


図2 大和三山と藤原京

(持統天皇の異母妹)との間に生まれた幼い珂瑠(軽)皇子に皇位を継承させるため、つなぎとして自らが皇位に就いたもので7年後に譲位している。この経緯は、古事記における天孫降臨の場面に酷似している。すなわち、高天原の神が地上(葦原中国)を治めることになったとき、「アマテラスオオミカミは当初、太子であったオシオミミノミコトの降臨を予定していたが、太子はニニギという子が生まれましましたのでその子を降ろすのがよいでしょうといったので、実際にはアマテラスの孫ニニギノミコトが八尺の勾玉・鏡・草なぎ剣の三種の神器を与えられ高千穂の峰に降り立った」との記述に対応する。アマテラス、オシオミミ、ニニギはそれぞれ、持統天皇、草壁皇子、文武天皇が当てはまり、天皇は実力でなく血縁で決まるという天皇制の整備を古事記の中で意図したと考えられる。なお、持統天皇は、天武天皇の崩御後、天武天皇と太田皇女(讚良の姉)の遺児大津皇子を皇太子草壁皇子への謀反の名目で処刑している。彼女はその批判を避けるべく、草壁皇子の即位を避け、自ら称制したのであろう。この事件は、皇極天皇が重祚した斉明天皇のときに有間皇子が絞殺され、壬申の乱での大友皇子の自死に続く、皇位継承をめぐる万葉時代の悲劇である¹⁴⁾。

持統天皇はカリスマ的権威を体現していた天武天皇の政策を引き継ぎ、律令制度の完成へ導いた実質的な統治者であった。彼女が雷岳に上ったとき、柿本人麻呂が作った歌では持統天皇も天武天皇と同様に神であった。

大君は神にし座せば天雲の雷の上に廬らせるかも (235番)

「大君は神でいらっしやるので 天雲にとどろく雷のさらにその上に 仮の宿りをしておいでになることよ」天武・持統両天皇の治世の期間は白鳳文化の時代である。持統3年(689年)に飛鳥浄御原令を制定しており、翌年には本格的な戸籍である庚寅年籍を作り公地公民制を基礎とした班田収授法を実施している。即ち、中央集権体制が整い、公民ひとり一人を掌握していた。持統8年(694年)、藤原宮が完成したので持統天皇は飛鳥浄御原宮から遷宮した。遷宮に際して、長屋の原に神輿を停めて、持統天皇が詠んだとされる挽歌がある。

飛鳥の明白香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ (78番)

「飛ぶ鳥の明日香の里を後にして(藤原京へ)いったなら あなた(天武帝)のいる(墓所の)あたりを目にすることができなくなってしまうだろうか」ただし、この歌は元明天皇が亡夫の草壁皇子を偲んで詠んだ歌ともいわれる。舒明天皇の国見の歌(2番)と同様に豊作を祈願して香具山で持統天皇が行った国見の歌はよく知られてる。

春過ぎて夏来たるらし白栲の衣乾したり天の香具山 (28番)

「春も終わり夏がやってきたらしい 純白の衣を乾している 天の香具山よ」
 白楮は楮こうぞの繊維で織った白布である。香具山は尊称「天」付くくらい大和三

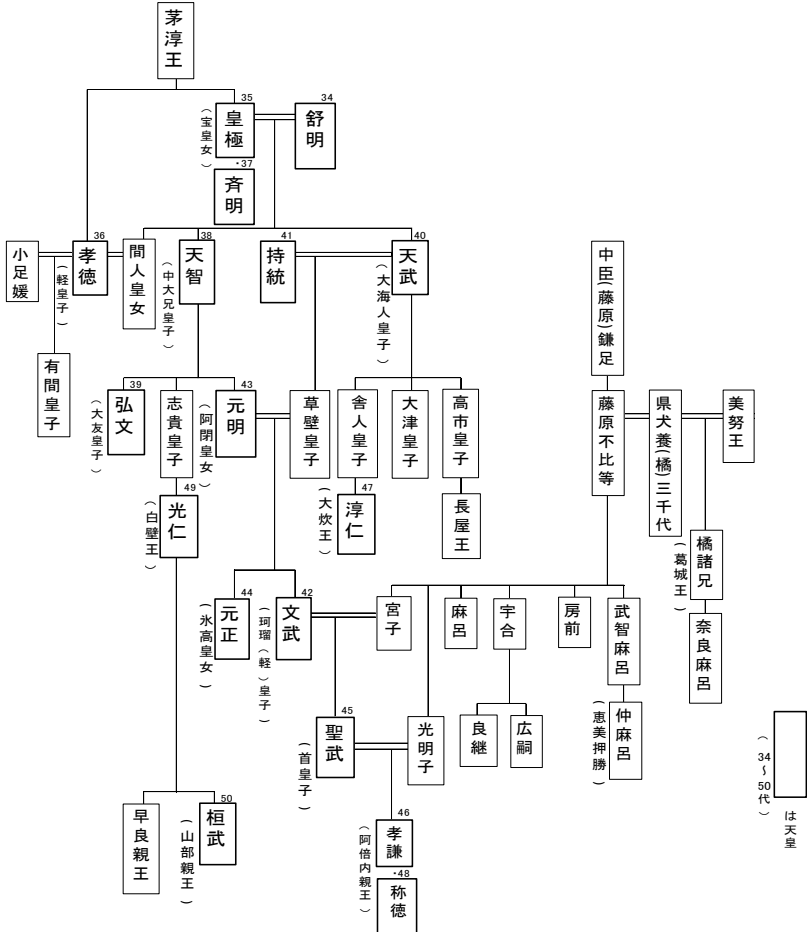


図3 飛鳥時代後半から奈良時代の天皇家等家系図

山では最も神聖な山である。香具山を詠った歌は、この28番のほか、前出の2番、13番、そして柿本人麻呂の歌、

ひさかたの天の香具山このゆふへ霞^{かすみ}たなびく春立つらしも (1812番)

「かなた遠くの天の香具山には この夕方 霞がたなびいている 春になったらしいよ」などがある。

5.3.2 文武・元明天皇

天武天皇と持統天皇の間に生まれた皇太子草壁皇子は、持統3年(689年)、27歳で薨去した。死の直前、彼は藤原不比等にわが子珂瑠(軽)皇子の将来を託している。後年、その珂瑠皇子が安騎^{あき}の野(奈良県宇陀郡)で遊獵して宿泊したとき、柿本人麻呂が詠んだ歌もよく知られている。

東^{ひむかし}の野に炎^{かぎり}の立つ見えてかえり見すれば月傾きぬ (48番)

「東方の野の果てに曙光がさしそめる ふりかえると西の空に低く下弦の月がみえる」この歌は単なる叙景歌でなく、亡き草壁皇子への追憶や壬申の乱の回想として読むべきだと考える人もいる¹⁸⁾。

持統11年(697年)、持統天皇の譲位により珂瑠皇子が文武天皇(名:カル、42代:在位697~707年)として即位した。このとき、天皇擁立に功績があったとして藤原不比等の子孫のみが藤原姓を名乗ることが許された。以降、藤原氏は祭祀氏族としての出自から政治氏族に変貌し、権臣として実務を担うことになり、大宝律令の編纂など律令制の確立に貢献する。

時代を少し遡るが壬申の乱のとき、藤原一族は、大友皇子を戴く近江朝派と見做され、乱後に一掃されているが、藤原不比等は子どもであったため処罰を免れ、下級官僚から立身を始めた。そして、彼は、天武天皇の子で壬申の乱のとき、父大海人皇子に代わって軍を指揮した太政大臣高市皇子が死去(696年)した頃から、政権の中枢に参画するようになる。藤原不比等には武智麻呂・房前・宇合・麻呂の4人の男子と珂瑠皇子(文武天皇)の夫人となった宮子と聖武天皇の後(光明皇后)となる光明子(安宿媛・藤三娘:母は県犬養三千代)他の女子がいる。藤原不比等は宮子と光明子を入内させることによって皇室との関係を深め、天皇家と一体化して藤原氏繁栄の基礎を築いた。そして、天智(38代)・天武(40代)・持統(41代)・文武(42代)・元明(43代)・元正天皇(44代)までの実に6代の天皇に仕え、特に、文武天皇以降の皇親政治に辣腕をふるった。ここに、弘文天皇(39代:大友皇子)は除いた。

文武天皇の夫人宮子には首皇子(後の聖武天皇)が生まれており、光明子には阿倍内親王(孝謙・称徳天皇)が生まれている。権威は天皇家が握り、権力は皇族以外の有力者・官僚が握るという体制は、飛鳥時代は蘇我氏と天皇家、奈良時代・平安時代は藤原氏と天皇家、中世以降は北条氏(鎌倉幕府)・足利

氏(室町幕府)・徳川氏(江戸幕府)と天皇家の関係のように続くことになる。

文武天皇は、則天武后の権勢末期にあたる大宝2年(702年)、遣唐使を再開し、山上憶良らを入唐させ、「**日本國者倭國之別種也 以其國在日邊故以日本為名**」(日本という国名は倭国の別名である 太陽が昇るところに近いので日本と名付けた:旧唐書)とあるように国号を「倭」から「日本」へと漢字表記の変更を唐に通告したと推定される。慶雲元年(704年)、在唐中の山上憶良が帰国に際して餞宴で詠んだ歌は

いざ子ども早く日本へ大伴の御津の浜松待ち恋ぬらむ (63番)

「さあ皆 早く日本へ帰ろう 大伴の御津の松も(その名の如く)待ち恋うているだろう。」

707年、文武天皇は母阿閉皇女に万機を摂する詔を遺して25歳で崩御したので、首皇子が成人するまでの中継ぎとして、阿閉皇女が元明天皇(名:アへ、43代:在位707~715年)として即位した。即位の翌年、慶雲5年(和銅元年:708年)、武蔵秩父から銅が献納されたので「和銅」と改元している。その銅を用いて和同開珎を発行した。なお、和銅開珎以前、天武12年(683年)に富本銭(飛鳥池工房遺跡出土)が鑄造されている。和銅3年(710年)、藤原不比等の主導により、元明天皇は遷都の詔を出し、葛城山を望む飛鳥の藤原京(橿原市)から北上して生駒連峰を西に臨む平城京(奈良市・大和郡山市)へ遷都して律令国家の盛期を迎えた。新たな都においては国家支配のために、元明天皇の和銅5年(712年)、古事記が献上され、翌年(713年)に地誌としての風土記の編纂が命じられている。

5.4 奈良時代—平城京

和銅3年(710年)に藤原京から遷都した平城京は、桓武天皇が延暦3年(784年)に長岡京に遷都されるまで政治の中心であり、元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・称徳(孝謙天皇の重祚)・光仁天皇の7代、74年間に亘って経営された。延暦3年(784年)に桓武天皇は平城京から長岡京へ移り、794年に平安京に遷都しているので、奈良時代は710~794年までと区分する。平城京は唐の長安城のミニチュア版で天平文化が花開いた一大政治都市である。

5.4.1 元正天皇

和銅8年(715年)、元明天皇は自らの老いと孫の首皇子がまだ若いことを理由に娘の氷高皇女に皇位を譲り、元正天皇(名:ヒダカ、44代:在位715~724年)として即位させた。元正天皇は妹吉備内親王の夫で従兄弟の長屋王(天武天皇の孫)に厚い信頼を寄せ、実質的に政務を執らせた。この皇親勢力

に対抗していた藤原不比等は日本書紀が完成した養老4年(720年)に薨去した。長屋王の権勢は、不比等亡き後の藤原4兄弟にとっては不愉快極まりなく、誣告で長屋王を追い詰めていくことになる。

元正天皇は文武天皇に続いて、養老元年(717年)、遣唐使として吉備真備、玄昉、阿倍仲麻呂、井真成らを唐に派遣した。吉備真備と玄昉は天平7年(735年)に帰国しているが、阿倍仲麻呂は海難に帰国を阻まれ、50余年、唐にあって李白や王維と交流した。また、唐王朝に重用され皇帝玄宗に寵遇された。彼の歌は万葉集には採録されていないが古今和歌集に、「もろこしにて月を見てよみける」と登場する。

天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも

「はるかに天空を仰ぎ見る月は 春日の三笠の山に昇る月と同じだなあ」と望郷の念が滲む。また、中国名で井真成と呼ばれた遣唐使のメンバーの一人に関する墓誌が2004年、西安で発見された。彼について「姓は井 字は真成 国は日本と号し 才は天の縦せるに称う」とあり、734年に死去している。

この頃、土地の私有を認めない律令制の原則が崩れ始めた。即ち、養老7年(723年)、田圃の不足を解消して開墾を勧めるために、新たに開墾したものは3代に亘って土地の保有を許すとした三世一身法が制定されている。

5.4.2 聖武天皇—天平時代

5.4.2.1 長屋王の変

文武天皇の母(元明天皇)と姉(元正天皇)の二人の中継ぎを経て、神亀元年(724年)、ついに藤原不比等の外孫である首皇子が聖武天皇(名:オビト、45代:在位724~749年)として即位した。聖武天皇の初期の政治は前代の元正朝に続いて長屋王を首班とする皇族グループが実権を握り、吉備真備や玄昉が重用されていた。しかし、政権奪取を図る藤原4兄弟との対立が深まり、次第に長屋王の政権基盤は弱体化して行く。

藤原一族は首皇子の妃である光明子の立后を望んでいたが、長屋王は彼女が皇族でないことを理由に反対した。藤原一族は、神亀6年(729年)、「長屋王は左道(邪道)を学んで国家滅亡を企んでいる」との誣告にもとづき藤原宇合らの軍勢を長屋王の邸に送り、彼を自尽に追い込んだ。天皇家独占の政治体制(皇親政治)が揺らいでいる中で起った王家一派が覆滅した「長屋王の変」である。この年、「天平」と改元されている。無実の罪で亡くなった長屋王を偲ぶ歌がある。

大君の命 恐み大殯の時にはあらねど雲がくります (441番)

世間は空しきものとあらむとそこの照る月は満ち開けしける (442番)

「天皇のご命令を尊んで 殯の宮におまつりするはずでない時に 雲にお隠れになった」、「世の中はむなししいものだとして この輝く月もみちかけするのだなあ」世間虚仮の仏教思想である。仏教でいう無常感は大伴家持が、

うつせみは数なき身なり山川の清けき見つつ道を尋ねな (4468 番)

「命とは(無常で)はかないものだ 山川の清けさを見ながら 仏道を求めたいものだ」と病床で詠い、修道を欲している。他にも万葉集には、当時まだ定着していない無常感と西方浄土思想¹⁹⁾を詠った歌が採録されている。

生死の二つの海を厭はしみ潮干の山をしのひつるかも (3849 番)

世間の繁き仮廬に住み住みて至らむ国のたづき知らずも (3850 番)

「(苦海などというように) 生と死の二つの海がいとわしいので 潮(満潮と干潮)のない山が慕われることよ」と人間の境遇を海にたとえ潮の満ち干に無常を見ており、「世間という煩わしい仮の宿りの世に住んで来て 住みたいと願う国(浄土)へ行く手段を知らないのだ」と浄土思想を詠っていることから、当時の仏教はまだ庶民のものではないものの必ずしも鎮護国家を祈る政治的手段だけではないようだ。

長屋王の変で反対勢力を排除した藤原一族は光明子を立后させた。皇族でない人臣からの史上初の皇后である。不比等以来、律令編纂に関わってきた藤原一族は、後宮政策に加えて官僚組織を掌握してさらなる権勢を振るっていく。ところで、長屋王派と見做された大伴家持の父旅人は大宰帥として筑紫に下ったときに詠んだ歌がある。

わが盛また変若めやもほとほとに寧楽の京を見ずかなりなむ (331 番)

「私の命の盛りは 再び若返って訪れることがあろうか いやいやほとんど奈良の都を見ずじまいになってしまうだろう」と諦観しているが大納言として都に戻り、731年に死去した。そして、次官として随行した小野老は、「あをによし寧楽の京師は咲く花の薫ふが如く今盛りなり」(328 番)を詠んでいるのである。また、遣唐使の経験があり、人生・社会を詠った万葉歌を多く残した山上憶良が大伴旅人に従って筑前守として大宰府に赴任したとき、宴会の席で詠んだ歌もある。

憶良らは今は罷らむ子泣くらむそのかの母も吾を待つらむそ (337 番)

「憶良はもう退出しましょう 子どもが泣いているでしょう その子の母も私を待っているでしょうよ」と終宴の挨拶を詠っている。

5.4.2.2 橘諸兄

光明子の母は、元明天皇の女官(命婦)であったあがたのいぬかいのみちよ 県犬養三千代である。彼女は夫美努王との間に葛城王をもうけたが美努王が大宰府に下向中、別離して

藤原不比等の室になり光明子をもうけたのである。和銅元年(708年)、彼女は元明天皇から橘姓を賜って橘三千代を名乗り、不比等の室としてまた光明子の母として権勢を誇ったことであろう。

天雲をほるに踏みあだし鳴神も今日に益りて畏けめやも (4235番)

この歌は橘三千代が聖武天皇に奉った一首で、「天雲をばらばら踏み荒らして鳴る雷でもどうして今日以上に畏れ多いことでしょう」と娘婿を讃えている。

天平8年(736年)、橘三千代の子葛城王が皇族を辞して母の橘姓を継いで橘諸兄を名乗り、母三千代の後ろ盾を得て藤原一族を凌ぐ大きな権力を握るようになり、聖武天皇を補佐した。難波にある橘邸で催された祝宴における聖武天皇と元正太政天皇の御製がある。

橘は実さえ花さえその葉さえ枝に霜降れどいや常葉の樹 (1009番)

橘のとをの橘八つ代にも我は忘れじこの橘を (4058番)

聖武天皇は、「橘は 実までも花までも輝き その葉まで 枝に霜が降ることがあっても ますます栄える常緑である樹だよ」と寿いでおられ、元正太上天皇も「橘 枝も撓むほど実がたわわに実った橘 幾代にも私は忘れまいこの橘を」と諸兄に讃美を送り信頼を寄せている。

長屋王の変があった天平元年(729年)、大々的に班田(口分田)の整備が行われている。橘諸兄がまだ葛城王であったとき、山背国に派遣され、薛妙観命婦らに送るセリの藁苞(藁で編んだ包み物)に添えて贈った歌がある。

あかねさす屋は田賜びてぬばたまの夜の暇に摘める芹子これ(4455番)

「茜色を帯びた昼は田を班ち与えて 夜は公務の暇にあなたのために摘んだセリだよ これは」と苦勞して入手した由を詠ってプレゼントに付けた歌である。

天平5年(733年)、多治比広成を大使とする遣唐使が派遣されている。この遣唐大使が、文武朝の大室2年(702年)に再開された遣唐使の一員として入唐した経験のある山上憶良を訪ねている。すでにリタイヤしていた老齡の憶良は大使の訪問を大いに喜び、頑張れよと雄々しいエールの歌を贈っている。

・人多に満ちてはあれども 高光る 日の朝廷 神ながら 愛の盛り
りに 天の下 羨し給ひし 家の子と 撰び給ひて 勅旨 戴き持ちて
唐の 遠き境に 遣され 罷り坐せ 海原の 辺にも 奥にも 神づま
り 領き坐す 諸の 大御神たち 船舳に 導き申し (894番)

「(大和の国には)人も多く満ちているのに 高く輝く日の朝廷で 神としての天皇が最も愛され 天下の政治を取られた家柄の子として あなたをお選びになり 今あなたは天皇のお言葉を奉戴して唐という遠い国土へ派遣され出立していかれま す そこで大海の岸にも沖にも神として留まり支配さ

れる諸々の大御神たちは船の先に立って先導し申し・・」と自らの記憶を思い起こし、神の加護の下に日本人を代表して渡航する誇りと使命感を持って臨めと励ましている。

この遣唐使の一員としてわが子が乗った船が難波津を発って往くとき、見送る親母が詠んだ歌には感動する。

旅人の宿りせむ野に霜降らばわが子羽ぐくめ天の鶴群 (1791 番)

「旅人が夜宿る野に霜が降りたら わが子を羽でつつんでおくれ 空行く鶴の群れよ」と鶴に息子のことを託している。養老元年に入唐していた吉備真備と玄昉は、翌年(734年)、この遣唐使船の復路便で帰国し、聖武天皇に仕えている。

この頃、「天平」という年号には程遠く、飢饉・天災が続き、疫病も蔓延している。天平9年(737年)、光明皇后も4人の兄全員を疫病(天然痘)で亡くしたため、彼女は甥の藤原仲麻呂に深い信頼を寄せた。その結果、仲麻呂は次第に権力を得て台頭していき、藤橘(藤原氏と橘氏)の勢力逆転に繋がる(5.4.3項参照)。

橘諸兄の功績には、唐から帰国した吉備真備や玄昉をブレーンとして疫病流行後の国政の立て直しや、天平12年(740年)に藤原宇合の子広嗣が乱を起こした「藤原広嗣の乱」の鎮圧がある。この乱は諸兄が藤原4兄弟の子弟をさしおき、ブレーンの2人を重用したことへの不満の表れである。天平10年(738年)、藤原広嗣が太宰少弐に任じられたがこれを左遷であると不満を抱きつつ赴任したことに始まる。2年後、藤原広嗣は朝廷を乱しているのは吉備真備と玄昉であるとして両名の処罰を求める上表を送り、挙兵したが官軍に制圧された。

天平18年(746年)正月、63歳の橘諸兄が諸王臣たちを率いて元正太政天皇の後宮の除雪奉仕をした。そのあと、褒美に酒宴を賜ったとき、「雪」を話題として歌を作れと言われ、多くの人が詠んでいる。橘諸兄は詔みことりに

降る雪の白髪しろかみまで大君に仕えまつれば貴くもあるか (3922 番)

宮仕えは辛いものだが、「降る雪のように白髪になるまで大君にお仕え申すとは畏れ多いことです」と恐縮している。大伴家持も詔に

大宮の内にも外にも光るまで降れる白雪見れど飽かぬかも (3926 番)

「大宮の内にも外にも輝くほどに降った白雪は見飽きないことだよ」とある。

5.4.2.3 彷徨五年

天平12年(740年)、聖武天皇は、藤原広嗣の乱に恐れたのか、長屋王の怨

霊の風説に怯えたのか、壬申の乱の時の大海人皇子の進軍行程をトレースしたのか^{はたまた}、大仏建立の適地を探すためなのか、理由はよく分からないが「朕^{ちん}意^いふ所有^{しゆ}るに縁^{ゆかり}て」と平城京を離れ、彷徨五年といわれる関東行幸をした。関東は鈴鹿・不破関より東の地方を指す。平城京を脱出して、伊賀、伊勢、美濃、不破、近江を巡り、恭仁宮・紫香樂宮を経て天平17年には平城京に戻っている。彷徨中の天平14年(742年)、必然性がよく分からない恭仁京の造営を始め、主要な殿舎は平城京から移築した。大伴家持は恭仁京を2首詠っている。

今造る久邇^{くにお}の京^{みやこ}は山川の清かき見ればうべ知らずらし (1037番)

今造る久邇^{くにお}の京^{みやこ}に秋の夜の長きに独り寝るが苦しさ (1631番)

「新しく造る久邇の都は 山川の清らかさを見ると 真にもここを都として君臨なさることと思われるよ」と京の造営を讃える一方、阿倍女郎には、「新しく造営する久邇の都で秋の夜長を独り寝るなんて切ないことよ」とぶつぶつ不平を詠っている。しかし、天平15年(743年)末、造都は中止し、恭仁京は放棄された。天皇の頻繁な遷宮・遷都は政治的混乱をもたらした。また、この年、農地の開墾を、一層、勧めるために、三世一身法は墾田永年私財法に改められ、律令制の崩壊を早める原因となった。すなわち、これ以後、貴族や寺社による開墾が盛んになり、平安時代の荘園制の成立につながっていく。なお、藤原不比等が編纂を始めた養老律令は757年に完成し、藤原仲麻呂によって施行された。

聖武天皇は、旱魃や飢饉・天災の多発・疫病の蔓延・藤原広嗣の乱などの危機的な社会情勢や政治情勢に不安を募らせたのだろうか、自身が神の立場にありながら、かつ成文化された律令で国家を運営すべきところ、仏教を信ずれば国家が安定するであろうと考え、彷徨中の天平13年(741年)に全国に国分寺建立の詔を発した。更に、天平15年(743年)に総国分寺の東大寺(金光明四天王護国寺)に仏教による鎮護国家のシンボルとして盧舎那仏像(奈良の大仏)建立の詔を出している。大仏開眼供養は孝謙朝の天平勝宝4年(752年)である。また、光明皇后の発願により、全国の国分尼寺の総国分尼寺として法華寺(法華滅罪の寺)が創建された。このように聖武天皇は、天武朝から続く王権を補完するものとして仏教崇拜の流れが徹底した。この仏教による鎮護国家が理想の国家であるとする考えは称徳朝まで続くが、平安遷都を敢行した桓武天皇によって、政治に対する仏教の在り方は大きく方向転換する。

5.4.2.4 天平勝宝年間

東大寺造営工事中の749年、陸奥国で金が産出している。聖武天皇はこれ

を喜び、年号を天平 21 年から「天平勝宝」と改めた。大伴家持も感激して赴任地の越中で渾身の力を込めた長大な長歌を詠っている。その反歌の一つを挙げる。

天皇の御代栄えむと 東なる陸奥山に黄金花咲く (4097 番)

この年、聖武天皇は自らを「三宝の奴」と称し、身勝手にも出家して娘の阿倍内親王に譲位し、孝謙天皇として即位させた。三宝とは、仏(釈迦や如来)・法(経典)・僧(出家者)のことで、三宝に帰依したうえで受戒した者が正式な仏教徒とされる。聖武太上天皇は、大仏開眼供養の行われた 2 年後、来朝した鑑真(唐大和上)から菩薩戒を受け、天平勝宝 8 年(756 年)に崩御した。

一方、光明皇后(皇太后)は信頼する甥の藤原仲麻呂を配下に置き、聖武天皇や孝謙天皇に代わって政治の実権を握っていた。皇后は、養老 7 年(723 年)、貧者・病人・孤児に施しをするために施設として悲田院を設置した。また、天平 2 年(730 年)には医療施設である施薬院を設置するなどブチグリーン政策をとっている。総国分尼寺の法華寺には民の汚れを拭うためのサウナ風呂式の蒸風呂「からふろ」がある。光明皇后の歌は万葉集に 3 首あり、その一つは上掲の遣唐使への歌(4240 番)であるが、もう 1 首あげておこう。

わが青子と二人見ませば幾許かこの降る雪の嬉しからまし (1658 番)

聖武天皇に捧げた歌で、「慕わしいお方と二人で見ましたら どれほどか この降る雪もうれしいことでしょう」と降りしきる雪を見て孤独を詠っている。天皇と藤原氏出身の妃との雪をめぐる贈答歌には天武天皇と藤原夫人が交わした前出の 103 番と 104 番の歌があり、これを意識したかもしれない。

5.4.3 孝謙天皇

陸奥国から金が産出した年、異例の女性皇太子となった阿倍内親王が孝謙天皇(名:アベ、46代:在位 749~758 年)として即位した。彼女は次代の淳仁天皇の後に称徳天皇として重祚している。この独身の女帝が支配した時代は、大仏の開眼供養(752 年)、聖武太政天皇崩御(756 年)、橘奈良麻呂の変(756 年)、光明皇太后崩御(758 年)、藤原仲麻呂の乱(764 年)、宇佐八幡宮神託事件(769 年)などが起こった。

この頃、唐は皇帝玄宗が君臨する全盛時代で、高いレベルの唐文化を受け入れた結果、日本は国力が充実し、文化が大いに進展した。孝謙天皇は天平勝宝 4 年(752 年)、藤原房前の子藤原清河を大使に命じ、副使吉備真備らと共に唐に派遣している。ちなみに、吉備真備は養老元年に続く 2 度目の遣唐使である。

大船に真楫繁貫きこの吾子を韓国へ遣る斎へ神たち (4240 番)

春日野に齋く三諸の梅の花栄えてあり待て還り来るまで (4241 番)
 四の船はや還り来と白髪著け朕が裳の裾に鎮ひて待たむ (4265 番)

光明皇太后は甥清河の無事帰還を願って、「大船に左右両舷の楫を一面に通してこの子らを韓国(唐のこと)へ遣わす 祝福を与えよ 神々たちよ」と春日大社に祈った。そして、遣唐大使清河は、「春日野に祭る神社の梅の花よ 咲き誇りつつ待ていよ 私が帰ってくるまで」と返している。春日大社は藤原氏の氏神を祭っているが遣唐使派遣の際に全国の神々に無事を祈願する国家的神社でもあった。孝謙天皇も酒とともに長歌を賜っている。その反歌は、「四隻の船が早く帰るようにと 白髪のかつらを付けて 私のスカートの裾に 齋い事をして待とう」白髪のかつらは長寿の象徴として祭事に用いたようだ。この遣唐使一行は入唐を果たしたが、帰路、大使が乗った船は難破して再び奈良に戻ることはなかった。阿倍仲麻呂も同じ船に乗っていたので帰国できず、「天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも」と望郷の歌を詠んだのである。別の船に乗っていた吉備真備は、天平勝宝 6 年(754 年)帰国でき、同乗していた唐の学僧鑑真も来日できなかった。鑑真は律宗の祖で東大寺に日本で最初の戒壇を設け、聖武太上天皇に受戒し、戒律道場としての唐招提寺を建立した。

孝謙天皇は即位したものの、実権は引き続き母光明皇太后と藤原仲麻呂が握っていた。この頃、聖武天皇に重用されていた権臣橘諸兄は老齢のため勢力は次第に衰え、藤原の政治権力の立場が逆転した。橘諸兄は行政権の一切を握る藤原仲麻呂によって失脚させられ、天平勝宝 9 年(757 年)薨去した。同年、諸兄の子 橘 奈良麻呂らは藤原仲麻呂の専横に強く不満を抱き、仲麻呂排除のクーデターを画策した。一方、密告によって企みを知った藤原仲麻呂は、

いざ子ども 狂業なせそ天地の固めし国そ大倭島根は (4487 番)

「さあ皆のものよ たわけた事をするでないぞ 天地が力を与えて固めた国であるぞ この大和の国は」とクーデター計画に警告を発した。にも拘らず橘奈良麻呂らは警告を無視して反藤原勢力を集めたが、またしても密告により、事前に数百人の関係者が捕縛され、拷問を受けた。奈良麻呂も拷問で横死したという。「橘奈良麻呂の変」である。この騒動で仲麻呂を初めとする藤原一族は反対勢力を一掃したので、独裁的な権勢は揺るぎないものになった。

5.4.4 淳仁天皇

絶頂期にあった藤原仲麻呂の権勢に嫌気がさしてか、退位を迫られてか、天平宝字 2 年(758 年)、孝謙天皇は仲麻呂が強権的に推薦する大炊王に譲位

し、淳仁天皇(名:オオイ、47代:在位 758~764)が即位して、孝謙天皇は上皇となった。仲麻呂の傀儡であった淳仁天皇は彼に藤原惠美朝臣押勝という誉れ高い名を与えている。広く恵を施す美德があり、暴虐の輩に打ち勝ち兵乱を押し鎮めたという意味である。位人臣を極めた藤原仲麻呂は、天皇のみが有する通貨の鑄造権を冒し、勝手に「開基勝宝」という日本初の金貨を鑄造するなど横暴を極めた。藤原4兄弟の従兄弟達も仲麻呂には同調せず、彼は孤立化を深めていく。万葉集の最後の歌「新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事」が大伴家持によって天平宝字3年(759年)元旦に詠まれている。

天平宝字6年(762年)、孝謙上皇は出家して法華寺に入り、「**政は通常まつりごとの小さいことは淳仁天皇が行え 国家の大事と賞罰は私が行う**」と宣した。相前後して孝謙上皇は自身の病気平癒を祈祷した僧弓削道鏡ゆげのどうきょうに絶大な信頼を寄せ、寵愛し始める。藤原仲麻呂が孝謙上皇に道鏡の寵愛を諫めたところ、政権復帰を願っていた孝謙上皇は激怒し、吉備真備を軍師とする孝謙上皇・道鏡派と淳仁天皇・藤原仲麻呂派との勢力争いに進んだ。遂には、天平宝字8年(764年)、藤原仲麻呂一派が朝敵となり、権勢を誇った仲麻呂は近江国で斬殺された。淳仁天皇は廃され淡路島に流刑となり、翌年、自死した。「藤原仲麻呂の乱」である。藤原4兄弟全員が病死してから始まり、橘奈良麻呂の変で確固とした藤原仲麻呂の栄華も儂いものであった。

5.4.5 称徳天皇

藤原仲麻呂の乱が終結した年、孝謙上皇は称徳天皇(48代:在位 764~770年)として重祚し、太政大臣禪師(のち法王)道鏡とともに父聖武天皇に続いて仏教重視の政策を推進した。そして神護景雲3年(769年)、「宇佐八幡宮神託事件」は起こった。この事件は大宰府の主神が、「**道鏡を皇位に就ければ天下は太平となるであろう**」とする宇佐八幡宮の宣託を奏上したことに始まる。道鏡は喜んだが称徳天皇は和気清麻呂を召し、宇佐八幡宮に宣託の真偽を尋ねさせた。和気清麻呂は、「我が国が開闢して以来 君臣の別は定まっている **天皇の位には必ず皇統を立てよ 無道の人**は排すべし」との宣託を得たとして、「前の宣託は虚偽である」と報告したところ、「**復奏が虚言である**」とされ、称徳天皇の逆鱗に触れて彼は滑稽にも、別部磯麻呂いわべのきまたな まろと改名されて、大隅国へ配流となった。しかし、神護景雲4年(770年)、称徳天皇が崩御すると道鏡の権力はたちまち衰退・失脚し、下野国の薬師寺別当に左遷されている。和気清麻呂は召喚され、復権して光仁・桓武天皇に仕え、平安遷都に

尽力した。

孝謙天皇はグリーンな政治も行っている。天平宝字2年(758年)、彼女は貧困・病・飢餓など民の苦しみを救済することを目的とする問民苦使設置の詔を発し、問民苦使を京畿内・東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海道にそれぞれ派遣している。問民苦使は現地視察の上、庶民(公民)の訴えを報告して実際の政策にも反映された。また、道鏡は生類を保護する放生司を設けている。

称徳天皇は未婚であったため、後継がないので天智天皇系の62歳の白壁王が藤原百川らによって擁立され、光仁天皇(名:シラカベ、49代:在位770~781年)として即位した。皇太子には百済系渡来人氏族である高野新笠を母にもつ光仁天皇の子山辺親王が擁立された。山辺親王は桓武天皇(名:ヤマノベ、50代:在位781~806年)として平城京で即位し、延暦3年(784年)に山城国の長岡京に遷都の後、延暦13年(794年)平安京に遷都した。壬申の乱以後、続いていた天武系の天皇は途絶え、天智系が天皇家を継続して今上天皇に至っている。桓武天皇は宗教と政治を切り離すために平安京には奈良仏教の遷移は許さなかった。その結果、彼は鎌倉時代に仏教が民衆のものになる素地を作った天皇である。

以上、古代国家が形成される過程としての万葉時代の政治的・文化的背景を概説した。弥生時代~7世紀頃の渡来人は稲作・土木建築・金属加工・養蚕と機織りなどの技術をもたらし、特に、雄略天皇期は明治維新に匹敵する万葉維新が興った時代である。また、遣隋使・遣唐使が持ち帰った大陸の最新情報も日本の政治形態と文化・文明の形成と発展に大きな役割を果たしている。更に、公伝した仏教は鎮護国家の手段として興隆し、東大寺の大仏建立でクライマックスを迎えている。

万葉時代は、仁徳天皇、光明皇后、孝謙天皇らはわずかに弱者救済の諸策を採っているが、皇族・貴族たちの理不尽な殺戮を含む多くの変・乱・騒動が起きて政治的混乱を生んだ野心渦巻く激動の時代であったと言える。一方、庶民にとっては、特に、大化の改新以降、私有民から脱したものの、律令制による租・庸・調や雑徭・兵役の負荷に加えて飢饉・疫病・天変地異が起きた苦難の時代であった。しかし、総体的に見て、大らかで秀逸な多くの万葉歌が詠われたよき時代でもあったと思いたい。庶民が参加する各分野のグリーンケミストリー論は別途に報告する。

6. 文献と解説

- 1) R. Carson、(青樹築一訳)、「沈黙の春 *Silent Spring*」、新潮社、1987。
- 2) T. Colborn、D. Dumanoski、J. P. Myers、(長尾力訳)、「奪われし未来 *Our Stolen Future*」、翔泳社、1998。
- 3) D. Cadbury、(古草秀子訳)、「メス化する自然 *The Feminization of Nature*」、集英社、1998。
- 4) 常温で液体の水銀と金・銀など低融点の金属との合金は液体である。
- 5) 中西進、「万葉集 全訳注原文付」、1～3巻、四季社、2008。
- 6) 小島憲之、直木孝二郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守校注・訳「日本書紀」1～3、小学館、2012。
- 7) 倭の五王は、「宋書」や「梁書」に記される讃(仁徳天皇または応神天皇)・珍(反正天皇または仁徳天皇)・済(允恭天皇)・興(安康天皇)・武(雄略天皇)である。彼らは413年～502年の間に13回も大陸と通交した。
- 8) 佐佐木隆、「万葉集を解説する」、NHKブックス、日本放送協会、2004。
- 9) 西本吉助、綿谷千穂、「色はどうして出るの」、裳華堂、1991。
- 10) 中国古来の政治思想で、天子は天命を受けて天下を治めることができるがもしその家(姓)に不徳のものが出れば新たな有徳者が天命を受けて新しい王朝を開くことがあるということ。
- 11) 相原嘉之、「飛鳥・藤原地域における文化遺産の特質・世界遺産登録へ向けての覚書」、明日香村文化財調査研究紀要、第7号、2008。
- 12) 山口佳紀・神野志隆光校注・訳 新編日本古典文学全集「古事記」、小学館、2009。
- 13) 遠山美津男、「臣、罪を知らず 蘇我氏四代」、ミネルヴァ書房、2009。
- 14) 杉山一男、「万葉時代の悲劇の皇子たち」投稿予定。
- 15) 稲垣節也校注・訳新編日本古典文学全集「風土記」、小学館、2012。
- 16) 鶴井忠義、「斉明天皇と狂心渠」、青垣出版、2012。
- 17) 遠山美都男、「壬申の乱」、中公新書、中央公論社、1998。
- 18) 荒木靖生、「万葉歌の世界」、海鳥社、2004。
- 19) 我が国の浄土思想は、平安時代中期に源信(恵心僧都)が著した「往生要集」で理論的基礎が築かれている。